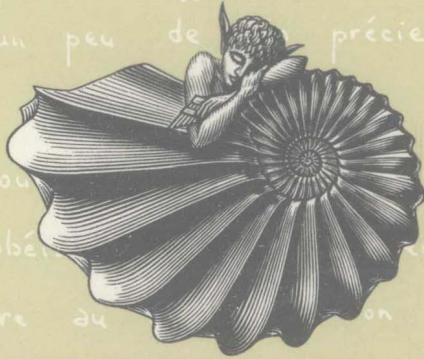


Kenichi Yoshida

J'ai, quelque jour, dans l'Océan,
(Mais je ne sais plus sous quels cieux)

J'ai, comme offrande au néant,
Tout un peu de précieux...



Qui vous a dit, d'un cœur ?

J'obéis au vin ?

Peut-être au bon cœur,

Songeant au sang versant le vin ?

吉田健一集成

Sa transparence accoutumée

8

Après une rose fumée

短篇小説

Reprit aussi pure la mer.....

酒宴

Perdu ce vin, 残光 les ondes!...

J'ai vu bon 旅の時間s l'air amer

Les figures le 怪奇な話 profondes.....

詩的幻想に充ちた奔放自在な短篇小説集四作を収録

新潮社

吉田健一集成

8

短篇小説

新潮社

Kenichi Yoshida

吉田健一集成

8

[第4回配本]



発行…………一九九三年一〇月一〇日

著者…………吉田健一〔よしだ・けんいち〕

発行者…………佐藤亮一

発行所…………株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一

電話 営業部〇三・三二六六・五一

編集部〇三・三二六六・五四

振替 東京四一八〇八

印刷所…………凸版印刷株式会社

製本所…………加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが、小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

吉田健一集成・8 ■ 目次

酒 宴

逃げる話

マクナマス氏行状記

夏は暑い

アドニスとナスビ

マッチ売りの少女

沼

百鬼の会

酒 宴

ロツホ・ネスの怪物

国籍がない大使の話

春の野原

残 光

辰三の場合

117 115 95 86 76 67 57 48 39 33 30 21 9 7

旅の時間

飛行機の中

昔のパリ

大阪の夜

英国の田舎

東北本線

ニュー・ヨークの町

ロンドン

神戸

流れ

出廬

残光

空蟬

邯鄲

126

141

156

171

186

197

199

211

224

236

249

261

274

286

京都	299
航海	311
怪奇な話	325
山運び	327
お化け	338
酒の精	349
月	360
幽霊	371
老人	382
流転	393
化けものの屋敷	404
瀬戸内海	415
解題	426

吉田健一集成
8

編集協力
清水
徹

酒

宴

逃げる話

宴 酒

昼になつた頃の食べもの屋が繁昌するのに対して、その時刻のバアががらんとしてゐてバアよりも物置きか何かに似てゐることは、誰でも知つてあると言ひたくても、そんなに早く開くバアもあることは多くのものにとつてどうでもいいことに違ひない。併しさういふ一軒に入つて見れば、そのやうな感じがする。そしてこの経験をするものは余程の暇人か、何か特別の目的があるものに決つてゐて、その男がさうしてそのバアに来てゐるのは人目が避けたいからだつた。店を開けてゐる以上、バアの方でも客を待つ建前にはなつてゐる。だから、断りはしないが、実際の商売はそれから大分先になることが解つてゐるので、客に別に注意もしないし、勝手に飲みたいものを飲ませて置くといふ態度を取る。バアテンさんも、早番の女給さんもその積りでゐるから一層、人目に付かない感じを強くして、それが場所ががら空きなのに加り、男は暫くは自分が一人である気でゐられた。

これはかなり貴重なことで、自分が文字通りに全く一人である時でも、さう自分一人と思へるものではない。例へば、仕事をしてゐれば、仕事があつて、序でにそれを頼んだ人間のこと

なども頭に浮ぶ。さうすれば、その人間と飲んでしくじつたことも、或は例へば、そこにゐ合せた他の人間のことも思ひ出し、一人で仕事をしてゐるところか、何人、何十人といふものが空に舞き合つて、しまひには、自分といふ人間はと持て余すことにもなる。併しこれとは逆の場合もあるので、その男がそこでウイスキーだか、ジン・フィズだかを前に置いてゆつくりしてゐられたのは、相手の人間が一人しかなくて、それがそこにゐなかつたからだつた。一人の人間とどうしても顔が合せたくなければ、人間臭いことは凡てその相手に集中して、その一人の人間がゐないだけでせいせいする。尤も、これも一種の憑かれた状態ではあるが、そのやうな時に、それに氣付く程の余裕があるといふことは先づない。

ここならば大丈夫といふ考へだけで、男は時間が少しづつしかたつて行かないのも苦にならず、空白を埋めるのにやたらに飲む必要もなかつた。どうせそんなに早く店を開ける位だから、そこは部屋の趣向に凝るだけの実力が無い極く当り前のバアで、誂へ向きに薄暗い中に、椅子とか卓子とかと名が付いてゐるのに過ぎない家具が置いてあり、鉢植ゑの植物もどこかの植木屋から借りて来たらしくて、かうしてそこにゐる男も、別に誰といふことはない一人の男の客に見えた。或る役割を演じてゐると、暫くはそれになり切つてゐられることもある。男は、バアが何時に開かうと、客が入れ代り立ち代り集つて来て混雑するのはそれから半日近く先の、午後の八時か九時頃の習慣になつてゐるのは、偶には随分、有難いことでもあると思つた。今流

行の避暑地に真冬に行くやうなもので、そこで会ひたくない人間に会へばもう絶体絶命であるだけ、それは大概はあり得ないことだつた。

昔は、全く暇潰しの場所がなくなつて、かういふ店にこんな時間に入つたこともあつた。その途端に後悔して、それでも直ぐに出て行くこともならず、無理に腰を降してビイルでも頼めば、その一本を空にするまでと思ふだけで落ち着かないのがひどくなつた。何か当てがあつてこそ、時間がたつて行くので、ただビイル一本の爲に一つの場所から離れられなくなつてゐるのならば、それは時間が止つたのも同然である。そして時間の止り方にも色々あり、これといふ当てもなしにゐるものにそれが生じると、人間にとつては時間とともに動くのが普通であるから、これは恐しく息苦しいことになる。ビイルの一本が際限なくそこにあるものに思はれて来て、コップに一杯に注いだ後でも、まだ壘の頭の方が少しばかり減つただけのやうであり、それを何度か繰り返してゐるうちに壘が空になるといふことは到底考へられない。第一、さうして何度も繰り返すといふことに堪へられるものだらうか。

そんな感じであるだけで一種の自己崩壊が始つて、さうして自分が崩れて行くのが、凡てのものが自分に注意してゐると思はれて来る形を取る。椅子が硬いのも、椅子が硬いではすまなくて、ビイルの減り方が遅いのとどういふ具合にか結び付けられ、窓もわざとこつちの方に光線を送つてゐるやうで、自分の頭がそんな風に変になつてゐることが相手の女給さんに解つた

らと思へば、息も止りきうになり、そして既に解つてゐる筈ではないかといふ、はふつては置けない気分もそれに加る。それ故に、まだ頭が完全に狂つてしまつてゐる訳ではないのであるが、確かに正常の状態ではないことがはつきりしてゐても、それで我に返ることは出来なくて、出来ない為に一層慌てて椅子が硬かつたり、ビイルが減らなかつたりすることを強く感じる。一口に言へば、やり切れないので、そのうちにビイルがなくなつてそこを出ると、自分がへとへとなつてゐることに気が付く。そしてその上にまだ、自分が普通のことを普通に出来なかつた実感を振り払へずにある。

併し今バアで飲んでゐる男には、もうそんなことはなかつた。年も、場合も違つて、どんなことをしても顔を合せたくない相手といふのは、その程度にもよるが、それがひどければ、兎にとつての狼とか、鰯にとつての鯛とか、命取りの大敵を意味する。男にはその相手がさうだつたと考へてよくて、その事実があるからには、狼を撒くことが出来た兎や、鯛の口先から逃げて岩と岩の間に隠れた鰯は辺りの景色をゆつくり眺めてゐられる。海藻は潮流に従つて揺れる影を砂の上に落し、風は草原を横切つて木立ちの下まで来て草を靡かせる。それ以外のことを考へる余裕、といふのは、雑念を抱いて、その一つ一つをこれといふ成算もなく追つてゐるうちに、それを何か大事なことに思ひ込むいつもの悪い癖は、敵から暫くは逃げる事が出来た安心と、その敵が何れは現れることを予期する気持に押し出されて、これは一種の放心状態に置かれたのも同じことになる。

そしてそれがなかなか得難いことになつてゐる今日、その原因を選び好みしてゐられるだらうか。

併し生憎、その次には退屈が来る。もともと我々は、何も敵に追はれる、或は、会ひたくない人間があるので逃げ廻る為に人間に生れたのではないので、午後の三時か四時のバアといふ、先づ大概のものから安全な場所にあることがはつきりすれば、人間本来の姿に戻つて、恐い思ひをしてゐたのが恐くなくなるのは何もなくなつてしまつたのと変らないから、人間はさういふ時に今とは別なことがしたくなる。併しそれならば、することは百貨店を覗くのから人殺しに至るまで幾らでもあつて、それをしないでここに來た理由がある訳だつた。だから、かうしてゐるのであつても、かうしてゐれば退屈である。このやうな際には、文庫本の論語などを出して聖賢の道に親むのも一つの方法であるが、それには生活様式や行為の系統が違つてゐる。呻きでもする他ない所で、そんなことをすれば、女給さんやバアテンさんに怪まれる。女給さんは、男が一人であつたらしい様子なので、時々お代りの飲みものを持つて來ては、バアテンさんがあるスタンドの方に行つてゐた。併し男が変な声でも出せば、病氣になつたのかと思つてバアテンさんと男の方を振り向くのに決つてゐた。

退屈も一種の不安定な状態である。何もする気が起らないか、或は大概のことをしては危険な時に、何かしなくてはゐられなくなるのだから、不安定なのは当り前で、さうなると、凡てがそれまでとは逆になるのも止むを得ない。罅が入つた訳で、そ

れでは海藻が潮流にそよいでも、ただそれを無心に眺めてゐる余裕が退屈の爲に持つて行かれて、海藻に隠れて見えない向うの方はどうかといふ心配も起きて来る。さうして頭を使ふことも、退屈を紛らしたい要求から生じる自然の結果なのかも知れないが、使ひ出せば頭はその線に沿つて動いて、退屈がその後押しをするから、そんなことをと打ち消してもとの退屈に戻る氣遣ひはない。さうすると、そのもつと前にあつた状態を繰り返して又それはし始める他なくて、バアにゐる男も、いつまでもそこにさうしてはゐられないと今更のやうに腰を浮かせる羽目になつた。男の退屈してゐる精神にとつては、これは思ふ壺である。

時間の問題ではなかつた。まだ勤めの人は勤め場所に、学校の先生は学校にゐてその日の仕事をしてゐる頃で、バアその他が込み始める夕方以後までには遠かつた。併し苦になり出せば、それは安心する口実ではなくなつて、避暑地に冬行くのが人へ会はない上で賢明かどうかは見方による。そこまで人が来ることは滅多にないと判断するのと、來たらおしまひだとびくびくするのは、その時の氣分次第であつて、男は退屈してゐた。そこにさうしてゐるのがいやならば、それが危険な理由は幾らでも頭に浮んで来る。相手が丁度そこを通り掛つて、ひどく喉が渴いてゐれば、ただそれだけの為ならばかういふ、昼間店を開けてゐる位寂びれたバア程、恰好なものはない。それに思ひ当ることは、相手が今バアの外に立ち止つて、これから中に入つて来る積りでゐる所を想像するやうなものである。退屈どころ

ではなくなつて、男はいきなりそこから飛び出したのを我慢しなければならぬ所まで事情が逆転してゐた。

飛び出した途端に入つて来ようとしてゐる相手にぶつかつたらと思へば、手足もすくむ。併し恐怖もそこまで行くと反省に近いものを生じて、その時はその時と思ふ決心も付く。そしてそれで落ち着かない氣持が解消する訳ではないので、その位のことですむならば、昼間バアに行つて退屈したり、そはそはしたりすることは無い。一つの問題が何となく片付いたやうに見えれば、次の問題がもうその代りに前と同じ場所を占めてゐて、それよりも、問題らしいものが幾つも同時に頭の中で押し合ひ、その一つ一つに就て考へるところではなくて、結局は、大變だといふことに要約される。男は、ジン・フィズがまだ半分ばかり残つてゐるのを見て、ビールを一本空けるのに苦労した昔の氣持に似たものさへ感じ、併し今はもうそんなことに構つてゐられる時ではないから、女給さんを呼んで勘定を頼んだ。そして釣りだとか何だかで待ち切れないのを紛らすのに、残つてゐるジン・フィズは瞬く間に飲み乾した。だから、その点では、少しも心配することはなかつたのに、そのことに改めて思ひ当りもしないのが、かういふ時の慌て方といふものである。出口のことも問題ではなかつたので、男は、その裏の便所に行く方の戸の外がその裏口へ抜ける廊下になつてゐたから、そつちから往来に出た。女給さんやバアテンさんは、男が便所から戻つて来るのを暫く待つてゐたに違ひない。

相手と本当の出口の所で顔を合せることが氣になつてゐれば、

同じ偶然から裏口にその相手があるかも知れないといふことは頭に浮ばないものである。男はすつかり、バアに相手が入つて来る危険から逃れた積りになつてゐて、殆ど命拾ひをしたのに近い安心を覚えて歩いて行つた。店の窓にネクタイが並べてあれば、近寄つてあれこれと品定めをして、その時相手が後から現れて男の肩を叩きでもしたら、どうする積りだつたか解らない。人間には恐怖とか、息苦しさとかを感じる上でも一定の限度があるやうであつて、益々恐くなるのがいつまでも続くといふことは稀にしかないものである。又さうなれば、發狂するか、死ぬかのどつちかで、話の初めに主人公をそんなことにしてしまつては意味がない。要するに、男はバアで大難を免れたと勝手に決め込み、雲雀だの、死一等を減じられた死刑囚だのと、これも全く勝手にいい氣持になつてゐた。

その上でバアに行つた方が、当人の感じにぴつたりしてゐた筈だとも考へられる。併し男にとつては、今はバアは警戒しなければならぬ所で、前とは逆の論法から、多勢のものが集つてゐる所は却つて人の目に付き難いといふ理由で大きなビルの地下室にある大衆食堂を選んだ。近代的な設備の粹を誇る料理の殿堂といふやうな触れ込みでも、一坪何百万円に当るか解らない地面を生かして儲るだけの商売をするのには、なるべく狭い場所に沢山の椅子や卓子を詰め込んで収容人員を増す算段をしなければならなくて、そこも階段を降りて行く途中から見ると、ただもう卓子を囲んでゐる人間の海だつた。確かに大きくて色ガラスその他で飾り立ててある所が殿堂で、近代的な設備

の方は、拡声器が呼び出しと蓄音器を兼ねてゐたりして、そこは実際に安全であるよりも、気を紛らせるのに適してゐる点で男が求めてゐる条件を凡て揃へてゐた。

客が互に話す声だけでも、相当なものである。そこへ女の子が注文のものを持つて来たり、客が立つた後を片付けたりしてゐて、客の方も始終出たり入ったりし、空いた卓子を探して広い食堂の中をぐるぐる廻つてゐるのも幾組もあつた。そしてその上を蓄音器が拡声器を通してがなり立て、食器がかち合ふ音も他の音に混じつて辺りを賑かにしてゐた。男は、もし拡声器で自分の名前が呼ばれたらとも思つたが、相手はそんなへまをする人間ではなかつたし、それにここでは免に角、さういふことは考へられなかつた。お婆さんが三人でハヤシライスを突つついてゐた。子供連れで来てゐる一組の卓子では子供が泣き出して、しまひに母親が子供を抱いて卓子と卓子の間を行つたり来たりし出した。併しその泣き声も騒音の一部としてしか聞えない位で、かういふ中で例へば、向うに友達がゐるのを見付けなどすることは、国電の人込みに揉みに揉まれて知つてゐる人間にぶつかるのと同じ位、思ひも寄らないことである。

友達とか、敵とかいふものは、少しは我に返つてゐる時でなければ頭に浮ぶものではない。所謂、取り巻きが多勢あるのが好きな人間に友達が少いのはその為で、そして敵がどうにも憎くなるのは、夜中に目が覚めたりしてその人間のことを思ひ出した時である。男には、そこに集つてゐる多勢の客が何れも大して違はない人間に見えて、自分もその一人だといふ感じが強

くなり、廻りの人間にはそれが現在してゐる様子しか認められないのと同じ意味で、自分の過去も騒音と雑事に掻き消されて威す力も、悩まず根拠もなくなつたと思ふことが出来た。それ故に、これは奇妙なことも知れないが、男はそれまでよりも我に返つてゐた。一つの単位に過ぎない状態に戻されれば、その単位は自分であつて、それ以外の余計なものに手を出すことは周囲の力が許さないから、却つてただ自分自身であられる。

男は解放されて、それは初めバアにゐた時どころではなかつた。他人並に頼んだハヤシライスの味が、ただ訳もなしに片付けて行くジン・フィズのと違つて、男が前から好きだつたハヤシライスの味がした。第一、自分が確かに何か食べてゐる感じがして、それまでは岩陰に隠れた鰯だつたり、草の中に伏せた兔になつたりしてゐたのだから、これはそれだけで新鮮な経験で、それが自分は生きてゐるのだと確認するのに似た氣持を男のうちに呼び起したのが、さうして生きてゐたその過去と繋つた。これは、過去の重荷を引き摺つて、現在の自分も見失ひ勝ちになるのと同じことではない。寧ろ、過去を重荷と感じる時に、それは確かに既に過去のことなので、そのやうにしてそれが失はれたことが現在までを貧しくし、これとは反対に現在の領分が過去まで拡つてゐるのが、我々が生きてゐるといふことなのではないだらうか。それならば、男は生きてゐた。

男は、フランスの国王達が狎区に囲つてゐた森の木を根を蔽つてゐる苔が厚くて緑なのに驚いて、その眼を離すと、ゆつくり流れて行く河の向うに宮殿が見えた。日本でどうかするとま

だ残つてゐる明治時代の大理石の宮殿が我々に何か異国情緒とも違つた、そこに周囲と調和しながら、周囲から切り離された別な世界があるといふ印象を与えるのは、西洋の宮殿から我々が受けるものと同じで、それは宮殿といふものの規模が大きい為、窓の枠や入り口の所にある階段などの細部までが遠くからでもはつきりそれと解り、それで我々はその窓がある部屋の中や、階段を登つて入り口から奥へ一足を踏み込んだ時のことを想像せざるを得ず、そしてそれが我々の想像を越えてゐるからである。男はその宮殿を見て、そこに別な世界があるのを感じた。

それはその宮殿だけでなく、河まで続いてゐる宮殿の庭や、宮殿の近くに石の橋が掛つてゐる河そのものも含めて出来上つてゐるもので、河には白鳥が何羽も浮び、そこに映つてゐる青空も他所から切り離されてゐるやうだつた。かういふ眺めには人間がゐない方がいいので、さうすれば、それはそれを眺めてゐる人間の世界にもなる。例へばそこに、庭の upper 段と lower 段を区切つて石の欄干が出来てゐれば、その欄干の端に飾りに置いてある石の花籠も、それを眺めた人間の記憶に残る。不思議にかういふ時には風が吹くのを感ぜないもので、それはその際に受けた印象がその記憶に後に修正されるからかも知れないが、もしさうならば、それは辺りが静かだつたといふ記憶があるからで、言はば息を止めて眺めてゐたのであり、実際には、息を止めてゐたのよりも、息遣ひまでが静かになつてゐたのである。白鳥はそのやうな瞬間に、嘴から顔に掛けての黒い部分が妙に

目立つ。

男は宮殿を見た時のことを思ひ出して、そしてハヤシライスを食べてゐた。宮殿を確かに見たことを、ハヤシライスの味や齒触りは少しも裏切らなかつた。さう言へば、周囲の雑音も、三人連れの婆さんの一人が何か口に触つたものを皿に吐き出しているのも、子供が泣き止んで席に戻されたのも、男にとつては今、自分の世界になつてゐるものに逆ひはしなかつた。男はまだ鉄道の鉄橋しか掛つてゐない頃に、大井川を渡して渡つてゐた。砂利の河原が尽きた所に渡し場があつて、舟が進む方向に針金が対岸まで張つてあり、それを走る輪から降りて来てゐる針金が舟に結び付けてあつて、舟はかうして水に押し流されずに川を横切つて行つた。水がきらきら光つて、一本の針金を頼りに川を渡つて行く以外に、この世に何もすることがないやうな気分誘はれ、男は金谷の町の後に続く丘の頂が柔かな日光を浴びてゐるのを見て、そこに家を建てれば住めると思つた。人間のあり方といふのはそんな訳で、外観だけで解るものではない。男はかうした形で、必要以上にその食堂で時間を過してゐた。或は、逃げる他に目的はなかつたのだから、それさへ忘れてゐれば、必要以上にといふことにはならないとも言へる。我々でも、何とかしなければと眼の色を変へてゐる時に、考へて見れば、それが要するに金を作る為なのに気が付いて、借金取りに向つて一昨日来いと聞き直る度胸が出来ると、一体それまでどういふ積りでそんな大騒ぎをしてゐたのか解らなくなる。丁度さういふ救ひに似た状態に男は今置かれてゐて、そ